

# 沖縄における都市八景の近代的変容に関する考察 —中山八景と首里八景を中心に—

呉 暁龍<sup>1</sup>・中井 祐<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 学生非会員 東京大学大学院工学系研究科 (〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1)

E-mail:wu-xiaolong@g.ecc.u-tokyo.ac.jp (Corresponding Author)

<sup>2</sup> 正会員 東京大学大学院教授 工学系研究科 (〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1)

E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp

本研究では、1879年の琉球処分から1945年の沖縄戦終結までの期間における沖縄県の中山八景と首里八景を対象とし、各景勝地の空間的変容に注目してその変遷過程を分析し、変容要因を明らかにすることを目的とする。文献調査を通じて、中山八景と首里八景の計16か所の景勝地の地形・地質などの空間的特性、宗教的意味、近代化の中での伝統的風景鑑賞様式の持続と展開状況を整理し、具体的な内容を明らかにした。さらに、都市の近代インフラ整備、日本の沖縄同化政策、沖縄戦における陣地構築を中心とした変容の要因を分析した。

**Keywords:** *Eight Views, Historical Landscape, Landscape Transformation, Okinawa Prefecture*

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的

八景は、ある地域における八つの代表的景観タイプの明確化により地域固有の景観的魅力をより良く世に伝え<sup>1)</sup>、風景評価の様式<sup>2)</sup>であり、又は一種の都市風景营造の理念・手法<sup>3)</sup>である。沖縄県における八景の歴史的形成は、中世・近世中国の冊封使<sup>4)</sup>と日本人僧侶<sup>5)</sup>の両方の影響を受けてきた。十八世紀後半からは、琉球出身の文化人も八景の選定に積極的に参加し、漢詩や琉歌等を通じて八景の文化的意味を豊かにしたことが知られる<sup>6)</sup>。

琉球王国時代の八景の中で、中山八景と首里八景は、現在的那覇市の都市景観とその構造に多大な影響を与えている<sup>注1</sup>。特に、首里八景は歴史文化眺望点及び視対象として、1980年代の沖縄県「首里杜構想」及び2022年公表の首里杜地区整備基本計画の重要な整備事項と位置付け、活用されている<sup>7)</sup>。しかしながら、近代以降、中山八景と首里八景の全体的な変容についての体系的、実証的な研究の蓄積はま

だ十分であるとはいえない。中山八景・首里八景の変容過程及び変容要因を明らかにすることは、近代において沖縄ないし東アジアの共通的な風景評価の様式である八景がどのように扱われていたかを議論する上で、学術上重要な意義があると考えられる。

また、これまで沖縄のアイデンティティへの研究には、多元文化による地域形成に関する研究<sup>8)</sup>があるが、八景を代表としての歴史的景観の変遷と地域アイデンティティの相互影響を考慮に入れた議論は極めて乏しい。景観変容と地域アイデンティティの形成というテーマを考える上で、有効な視座となり得ると考える。本研究の成果は、SDGs 未来持続可能な都市を支える公園・緑地の現代的課題「より良い地域の歴史・文化を守る拠点を形成するために、どのような未来像に向けてどのような価値評価・景観計画方法論を構築すべきか」を論じる上で基礎となる歴史的知見が得られると考える。

以上の通り本研究は、1879年の琉球処分から1945年の沖縄戦終結までの期間における沖縄県の中山八景と首里八景を対象とし、各景勝地の空間的変容に

注目してその変遷過程を分析し、変容要因を明らかにすることを目的とする。

## (2) 研究の位置付け

本研究に関連する既往研究には、沖縄の八景の内容を論じた研究がある。琉球王国時代の八景の歴史的形成及び関連理念に関する研究<sup>9) 10)</sup>がある。沖縄県における戦前の八景の内容及び出典の整理<sup>11)</sup>のほか、近世の北斎の「琉球八景」を対象とした岸<sup>12)</sup>、溝口<sup>13)</sup>の研究がある。また、中国冊封使の詩文等の史料に基づく、沖縄県の八景の内容及び文学的意味を解明した童<sup>14)</sup>、冉<sup>15)</sup>の研究がある。また、沖縄県における八景関連の理念について、沖縄の御嶽・拝所の意味と解釈について、平良<sup>16)</sup>、伊従<sup>17)</sup>の研究がある。一方で、近代琉球処分後、八景は沖縄地域で、どのように扱われていたのか、その空間と文化意味は時代とともに、どのように変容してきたのかを明らかにするような研究はなされていない。

一方、近代沖縄の中山八景・首里八景に関する既往研究には、那覇久米村あるいはそれに隣接する地を描いた中山八景の近代的変容を考察した研究<sup>18)</sup>や、那覇久米村風致を表現した「糸村竹籬」などの戦前の様相に言及した研究<sup>19)</sup>がある。これらは、中山八景、首里八景の一部の変容に関する研究であり、琉球処分から敗戦まで、激変の近代化のプロセスの中に、中山八景と首里八景の全体的変容について論じた体系的な研究はこれまで行われていない。

本研究は、近代沖縄県の文字史料及び写真・絵画など画像資料における、中山八景と首里八景の空間的変容を分析し、それを通じて両八景の全体的変容要因を明らかにするものである。これは本研究の新規性であると考えられる。

## 2. 研究の方法

### (1) 分析対象

本研究では、中山八景と首里八景計16か所の八景スポットを対象として分析を行った。分析対象は戦前の那覇市と首里市に分布し、即ち今の那覇市の二つの中核<sup>注2)</sup>の代表的景観の明確化・顕在化である。また、両八景スポットの分布範囲のスケールに見ると、都市八景<sup>注3)</sup>に属している。その変更過程及び変容要因の解明は、今後、八景の文化価値を活かした持続的なまちづくり、都市計画、景観施政、観光政策に資する知見を得ようとするものである。

### (2) 手法及び資料

主として文献調査に依った。本研究では、以下の種類の資料(表-1)を参照した。

表-1 本研究の主要な参照資料(筆者作成)

分類	資料名	著者	出版年
・方志・市史 ・史跡紹介等	沖縄縣地誌略	沖縄県師範学校	1884
	沖縄県史 第9巻(各論編8 沖縄戦記録1)	琉球政府	1971
	那覇市史通史篇 第二巻(近代史)	那覇市企画部市史編集室	1974
	那覇市の史跡・旧跡ガイドブック	那覇市歴史博物館	2014
政府公文書・報告書 ・軍の防衛対策等	琉球景況概略	熊本鎮台	1878
	南島探験	笹森儀助	1894
	那覇築港誌	沖縄縣	1916
	神まうで	鐵道院	1919
	史蹟名勝天然記念物調査報告 第21号	中野治房	1921
	沖縄県師範学校創立五十周年記念誌	松本完栄	1931
	極秘 沖縄防備対策	石井虎雄	1934
	首里市記念誌：市営バス一周年	首里市	1936
帝国陸海軍作戦計画大綱	大本營	1945	
雑誌・新聞 ・観光誌等の同時期 の出版物	那覇市史 資料篇 第2巻中の2 新聞集成・市政関係資料	那覇市企画部市史編集室	1969
	沖縄教育	宮城龜	1908
	風景第十巻 11月号第十一号	日本風景協会	1943
	日本名勝地誌 第拾壹編 琉球之部	田山花袋	1907
	大日本地名辞書 続編	吉田東伍	1909
	九州名所案内：附・壱岐、対馬、琉球	池田文太郎	1910
	日本案内記 九州篇	鐵道省	1935
	観光沖縄案内	仲吉朝睦	1937
紀行文・漢詩集 ・回想録等	琉球漫録	渡辺重綱	1879
	琉球の研究(上, 中, 下)	加藤三吾	1906
	琉球竹枝	高崎義男	1907
	御祭草紙	西村捨三	1908
	槐南集	森槐南	1912
	薩摩と琉球	横山健堂	1914
	南島夜話 訂4版	秦蔵吉	1917
	琉球諸島風物詩集 再版	佐藤惣之助	1922
	琉球遊記	相川俊孝	1924
	藍田谷口先生全集	谷口中秋	1925
	日本写生紀行	アトリエ社	1930
	琉球遊草	久保天随	1933
	琉球：建築文化	伊東忠太	1942
	思出の沖縄	新崎盛珍	1956
柳宗悦全集 著作篇 第15巻	柳宗悦	1981	
戦前の写真集・風俗画報 ・絵葉書・絵画等	宮内庁「各種写真」第十一	宮内庁書陵部所蔵	1887
	沖縄風俗図会	野口勝一	1896
	那覇港之景(絵画-油彩)	山本芳翠	1888
	琉球波之上神社(絵画-水彩)	吉田博	1912
	泉崎橋(絵画-水彩)	吉田博	1912
	沖縄写真帖 第1輯	坂口総一郎	1925
	沖縄県人物風景写真帖	仲宗根源和	1933
	沖縄県人物風景写真大観	上原永盛	1935
むかし沖縄：写真集	琉球新報社	1978	



の点については今後の課題に設定したい。

#### (4) 沖縄戦の陣地構築と中山八景・首里八景

石原昌家の「沖縄戦の諸相とその背景」には、「アメリカの大部隊を三カ月余も小島の沖縄に引きつけておけたのは、沖縄の地形を最大限に生かした日本軍の作戦に拠った。それは、中南部の各地に点在している自然洞窟を利用して、洞窟—トンネル—墓などを連結した複層陣地を張りめぐらし…」と論述している<sup>31)</sup>。この点につけて、特に高台に位置する首里は戦闘開始前の主陣地として、周辺の高地は兵力配置できる限り、陣地を構築し<sup>32)</sup>、沖縄戦激戦期間、首里一帯は地形が変わるほど、猛烈な砲撃を受けた。

本研究は沖縄県立埋蔵文化財センター2002-2003年度戦争遺跡詳細分布調査の成果「那覇市戦争遺跡分布図」<sup>33)</sup>と中山八景・首里八景の分布を比較し、位置関係を整理した。中山・首里両八景計16か所のうち8か所が日本軍陣地に構築された実態を明らかにした。また、陣地構築と中山八景・首里八景所在地の地形・地質類型との強い関係性を示した。

### 4. 近代沖縄都市八景の変容要因と八景の持続及び展開の考察

#### (1) 近代沖縄都市八景の変容要因の分析

第3章では、中山八景と首里八景の16か所の景勝地の空間的変容実態と経緯を整理し、空間的変容要因は、a) 都市近代化・インフラの整備等、日本の沖縄同化政策、c) 沖縄戦の陣地構築と地上戦の破壊、に整理できた。

##### a) 都市近代化・インフラの整備等

都市近代化・インフラの整備等は、戦前の那覇市と首里市の八景に多大な影響を与えた。中山八景・首里八景の変容は那覇・首里の都市空間の異なる都市化のプロセスを体現している。那覇市の都市近代化は首里より激しい、相応的に那覇市にある中山八景は戦前、変容の景勝地が多く、変容の程度も深い。一方で首里八景所在の首里は都市の近代化が相対的に遅延していたので、沖縄戦前に、首里八景が一定の全体性をたもっていたと推測している。

##### b) 日本の沖縄同化政策

近代沖縄学の父と言われている伊波普猷は、明治期の首里八景の空間について、「首里三平等の頑固党（復国運動の支持者）の連中は、毎月、朔日と15日とは、百人御物参といって、古琉球の大礼服

那覇港及び那覇入江一帯の八景の数は多く（5ヶ所）、近代以降の埋立及び築港工事により、激しい変容を受けた（図-1）。「臨海潮声」の臨海寺及び突堤は取り壊され、構造的不可逆的な変容を受けた。

#### (3) 近代首里八景の空間的変容

首里の近代都市化は相対的に遅延していたと言える。文献調査によって首里八景の各場所関連の建設動向を整理した（表-2）。また、中山八景のような八景絵図がないが、首里八景の各場所を近世首里城下町地図と1925年首里市地図上に落とし込み、屋敷・市街地範囲の比較を行った。それ以外、戦前の写真の分析と文献記述と共に、首里八景各景勝地及びの近代的、空間的変容実態を把握した。

前述の近世と1925年との首里の屋敷範囲の比較により、近代以降1925年まで、「万歳嶺夕照」の観音堂附近は宅地化が見えるが、全体としての首里の都市化はほぼ停滞状態とは言えよう。市街地範囲は大きな変化がなかったと言える。沖縄戦前に、首里八景全体的状態が相対的に良好であったと推測している。「冕嶽積翠」, 「経台新荷」, 「龍潭夜月」, 「虎山松濤」, 「万歳嶺夕照」の実態について、戦前の写真を通じ、近世から戦前まで、大きな変容がないという実態を確認した。「零壇春晴」に関する文献は「松が枯れ出し、遂に一本も残らないやうになって了った」と記載されている、この景の変容を読み取ることができた。残る「崎山竹籬」, 「西森小松」は実証的史料が現時点把握していないので、判明していない。

植生の実態について、戦前の絵葉書<sup>28)</sup>により、「経台新荷」の蓮は戦前まで持続していたことが判明した。また、「零壇春晴」, 「冕嶽積翠」, 「虎山松濤」, 「西森小松」, 「万歳嶺夕照」共通の琉球松の松林の実態は、戦前の沖縄県の林政と関連していたと考える。前述の王府時代の首里風水学説の通り、特に首里城下町周囲のこれらの松林は風水の気の漏洩を遮断する位置づけられて、王府の法令等により、保護されていたを推測している。しかし、1903年沖縄県土地整理事業の完成により、沖縄県で、昔共有・共同維持管理の林の大部は一斉に私有化させた<sup>29)</sup>。また、近代以前の沖縄の砂糖産業は砂糖樽のクレ板の用材や燃料用の薪木等の需要<sup>30)</sup>がもともと存在し、周知のように近代以降の沖縄の砂糖産業は爆発的な発展を達成した。首里八景の変容について、林政変化の影響も考えなければならないと考える。こ

をつけて、弁ヶ嶽、円覚寺、弁才天、園比屋武嶽、観音堂等に参詣し、旧藩王尚泰の健康と中国<sup>註4</sup>の勝利とを祈った。」<sup>34)</sup>と回想している、と回想している。弁ヶ嶽、弁才天、観音堂、即ち首里八景の「晷嶽積翠」, 「経台新荷」, 「万歳嶺夕照」の空間である。当時の実態の描述を通じ、八景背後に潜む多元的イデオロギーや地域アイデンティティと八景空間の近代的変容との関係性を垣間見ることができる。

一方、置県後、中山八景「筍崖夕照」の景物の一つの波上宮は、官幣小社に列せられる。加治は、「沖縄にも官幣社を設置するという事は、琉球国だった地が日本の一県であることを文化的・宗教的にも示す意味があった」<sup>35)</sup>と評価している。前後の複数回の増改築<sup>36)</sup><sup>37)</sup>を経て、琉球処分時点で僅か三つの小祠<sup>38)</sup><sup>39)</sup>は、戦前、立派な神社に変貌した(図-2)。つまり、中世以来波之上一帯で共存している中華らしさ(護国寺)・大和らしさ(波上宮)・琉球らしさ(波上の御嶽・地元人の名所)の融合状況を世替わりにより政治的関与し、大和文明の目印や道具、即ち波上宮の大和らしさの視覚要素を強化し続けることであろう。また、昭和八年の波上宮復興三百年祭、綱引<sup>40)</sup>などと共に、沖縄人のアイデンティティの形成に影響、大和の色彩の強化を図っていた。

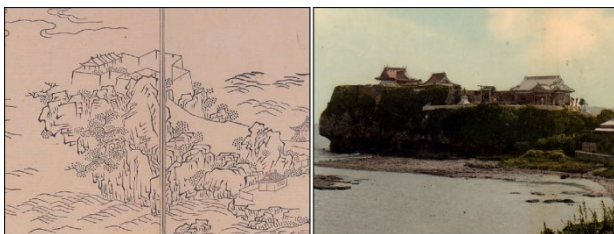


図-2 近世の波上宮(左)と大正・昭初期波上宮(右)  
(画像出典: (左)周煌『琉球国志略』首巻「図絵」、沖縄県立図書館-貴重資料デジタル書庫所蔵。(右)那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料より一部拡大)

近代沖縄の地域アイデンティティの状況の主要な側面は「日琉同祖論」や「御嶽・拝所の神社化」等の日本への同化、あるいは近代化によって形成されていたということは史実である。同じように、1936年、招魂社が中山八景の一つの「龍洞松濤」所在の奥武山に成立され、間もなく対外戦争の拡張と共に、1940年に沖縄県護国神社に昇格させた。1910年に、中山八景・名所である奥武山は当時那覇市唯一の近代公園として全山が公園化されたが、わずか二三十年の間に、風景の変容の過程で多くの大和らしさの

要素が加えられてきた実態を確認した。

一方、大正十二年七月より同年八月に至って沖縄を視察した<sup>41)</sup>伊東忠太は、当時の沖縄県における神社神道の実態について、「今日琉球に於て、神社崇拜の思想は殆んど皆無であるといつても過言ではない。官幣社の波上宮でさへも土地の人は殆んど顧みないくらいである。まして他の七社などは、殆んどすべて荒廢の極に達してゐるが」<sup>42)</sup>と述べている。沖縄人想像以上の抵抗はかつての八景の景勝地の波之上で、緘黙に表現されていたとは言えよう。

### c) 沖縄戦の陣地構築と地上戦の破壊

沖縄戦の経緯を概観すれば、米軍の1944年の10・10空襲により、那覇市の中核部の殆ど90%が爆撃され灰燼になった<sup>43)</sup>。その後米軍は1945年3月23日の上陸前の大空襲で本格的な攻勢を開始した<sup>44)</sup>。同年6月22日、米軍は完全に沖縄全島を占領した。

那覇は海岸に在り、艦砲の攻撃を受けやすい、また、地形上の大部分は海岸低地であり、言うまでもなく防衛上の困難が分かる。近代以降の都市化を乗り切った中山八景の残るものは那覇の市街地はとともに、この時期に空襲や艦砲射撃で、大部廃墟と化していた。1945年12月の那覇市航空写真<sup>45)</sup>で、奥武山公園一帯の植生はわりに保たれている。またはアメリカ海兵隊が1945年6月15日に撮影した護国神社で、琉球松の姿が見えている<sup>46)</sup>。また、1945年撮った波上宮及び護国寺の写真(図-3左)で、屋根が破損していたが、建物は大部残っていることが見える。沖縄戦を経て、「龍洞松濤」と「筍崖夕照」は一時的に生き残っていた実態を明らかにした。



図-3 1945年の波上宮及び護国寺(左)と焼野となった首里(右)(画像出典: 沖縄県公文書館所蔵資料(左)<sup>47)</sup>, 那覇市企画部市史編集室: 『那覇百年のあゆみ: 激動の記録・琉球処分から交通方法変更まで』(右)<sup>48)</sup>)

首里一帯は相対的内陸部に位置するため、後方の主陣地及び沖縄守備軍即ち第32軍の軍司令部の所在であり、周辺の高地は兵力配置できる限り、陣地を構築し、沖縄戦の激戦期間、首里一帯は地形を変わるほど、猛烈な砲撃を受けた。1945年12月の首

里地区の航空写真<sup>49)</sup>から見ると、五百年以上の歴史を持っている首里城をはじめとする琉球王国時代の文化遺産、首里城下町ないし首里周囲の林の大半が破壊されることとなったことが分かる。沖縄戦期間及び直後の首里城一帯の写真により、首里周囲の高台の林は大部消えたことを確認できる(図-3右)。前節で説明している陣地を構築された「零壇春晴」「冕嶽積翠」「虎山松濤」「西森小松」「万歳嶺夕照」「崎山竹籬」の景物の植生や町並みは図-3の同じ状態と推測している。他の戦後写真により、「龍潭夜月」の池は残っているが、周辺の景観は全て破壊され、「経台新荷」の弁才天堂は破壊された様子を確認した。

## (2) 近代沖縄の都市八景の持続と展開

本節は、近代以降沖縄の都市八景がどのようにとらえたかという課題について考察するものである。

### a) 近代漢詩集・写真集・観光誌等に見る中山八景及び首里八景

琉球処分直後、沖縄県庁職員として在任していた谷口復四郎の漢詩を取り上げたい。谷口復四郎は在任期間に創作された漢詩は明治期、沖縄の八景と最初に遭遇した日本本土からの文化人は、どのような目線で沖縄の八景をとらえたかという課題の一端を解明する貴重な史料である。谷口復四郎のこれらの漢詩の中に沖縄における八景の景勝地を題材にした漢詩は「長虹暁星」,「冕冠積翠」,「経臺新荷」,「城嶽晚眺」,「龍潭觀月」,「泉崎夜月」等計14首、重複する場所を削除した後、中山八景・首里八景合わせて16か所の中に11か所を吟詠している。具体的には、中山八景の景を詠んだのは12首あり、首里八景の景を詠んだのは4首が存在している。また、これらの漢詩の中には、8首は中山八景・首里八景の表題と完全に一致している。

1887年11月伊藤博文の視察団は、漢詩人の森槐南を同行して沖縄を訪問した。森槐南の沖縄の旅に関する漢詩は『槐南集』巻九<sup>50)</sup>に収録されている。その中で、「沖縄竹枝二十首」と題されている詩の中には、第二及び第六首は中山八景の項目を言及している。以下は第二首を引用する。

沖縄竹枝二十首 其二 (森槐南)  
那霸港頭來去潮  
瀛洲仙客笑回橈  
長虹秋霽有誰賞  
初日光浮明治橋

注：橋在垣花長虹秋霽清人所撰琉球八景之一

この詩において注目されることは、森槐南の注である。特に「橋在垣花長虹秋霽清人所撰琉球八景之一」は直接的に琉球八景を指しており、又は八景の選定者の「清人」、即ち1719年の冊封使徐葆光を強調している。また、八景に含まれた中華イデオロギーについて、森槐南の詩には、昔の風景鑑賞様式はもう時代遅れ、大和文明の明治橋こそ称賛すべきものであるという思想を伝えているとは言える。

明治以降の中山八景と首里八景は地域の歴史的文脈を示す記号になり、戦前の沖縄における各種の写真集や絵葉書や紀行文などに散在している。具体的には、1925年に出版された『絵筆を載せて』<sup>51)</sup>において、挿絵四の「虎山松濤」及び「琉球首里八景」の八つの表題を掲載されている。1933年に出版された『沖縄県人物風景写真帖』の写真「波之上全景」の説明文<sup>52)</sup>には「残波岬の遙か南方の海岸に突出した奇巖よりなり景色雄大夕照の美を以て中山八景の一に数へられてゐる(後略)」と述べられている。この文章には「筍崖夕照」の名称及びその事象である夕照の美を明確に言及したが、戦前まで中山八景は沖縄の人々の風景鑑賞や環境の美意識等に対して一定の影響力を発揮していたことを示している。

また、戦前の沖縄観光誌や案内書において、昔の中山八景及び首里八景の景勝地は那覇市・首里市の名所旧蹟として位置づけ、取り上げている<sup>53) 54)</sup>。

### b) 「落成式の歌」から見る沖縄県における伝統的八景意趣の持続

首里八景の一つである「龍潭夜月」の龍潭池畔にある沖縄県立師範学校は1904年火災に罹り、1907年7月にもとの場所で再落成した<sup>55)</sup>。「落成式の歌」の歌詞と曲譜1908年の『龍潭同窓会々報』第1号<sup>56)</sup>に掲載されている。現時点に筆者が把握している文献には、歌詞の作者は不明である。歌詞冒頭の「かしこに立つは虎頭の陵、ここは龍潭の池の邊よ。照る月もさす日の影も、淵湘<sup>注5)</sup>の眺めめずらしく」(図-5)は明白に首里八景由来の一つである瀟湘八景の趣旨を指している。この歌詞は、当時沖縄最高学府の沖縄県立師範学校の知識人が近世沖縄に定着された瀟湘の眺めを尊重する志向を示している。

また、1902年に儀間眞祐は「龍潭魚躍」と題されている漢詩の序<sup>57)</sup>において、

龍潭は首里八景の一にして、何を以て名を得るや …中略…而して嚮さに此の龍

潭の滸りに師範学校を建築し、文武礼楽諸芸の巖師を設立して、以て英才を教育し給へり、斯く文明開化の善論、宛も明月の淵潭に照臨するか如し…（後略）

と述べている。この序文を見ると、近代以降沖縄固有の伝統文化の一面である八景の持続実態が分かる。つまり、沖縄の八景に潜んでいる風景鑑賞理念や地域アイデンティティと、近代の師範学校教育の人間形成の精神や理念と融合させられ、当時の沖縄の知識人に受け継がえていたことを確認した。

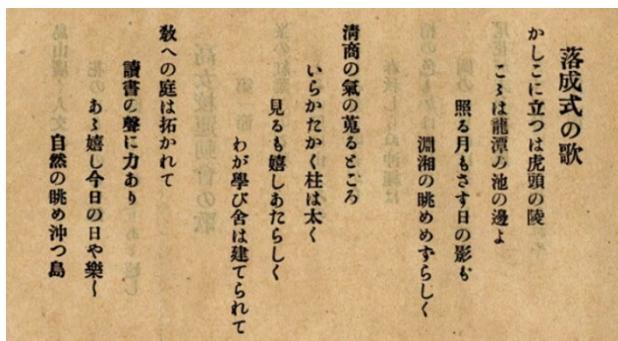


図-5 「落成式の歌」の歌詞（画像出典：国会図書館デジタルコレクション、『龍潭同窓会々報』第1号）

## 5. まとめ

本研究では、近代沖縄県に関する文字史料及び写真・絵画など画像資料における、中山八景と首里八景の空間的変容を分析し、両八景の全体的変容要因を明らかにした。その成果は以下の通りである。

1) 中山八景・首里八景の空間的な変容特徴について、まず、一部の八景空間、例えば「長虹秋霽」と「中島蕉園」は、近代以前既に変容していた。また、中山八景・首里八景の近代変容は単純にいくつかの工事による変容ではなく、「世替わり」と共に、所有権・維持管理の変更により、大きな影響を受けた。また、中山八景・首里八景の変容は那覇・首里の都市近代化を反映している。特に那覇築港事業等の大規模なインフラの整備のため、中山八景の変容の程度は深い。一方、首里八景の変容は相対的に遅延していたので、沖縄戦前に、首里八景が一定の全体性をたもっていた。

2) 那覇・首里両都市の都市八景は個別の例外を除いてほとんどすべて沖縄戦で深刻な変容を受けた。

3) 中山八景・首里八景の近代変容過程は、近代

以降の日本政府が沖縄同化及び戦前の皇民化教育を強化するという政策を反映している。

また、以上の空間的変容要因の考察以外、本研究は近代漢詩集・写真集・観光誌等において、中山八景及び首里八景関連する内容を分析し、近代沖縄の八景文化の持続と展開状況を実証的に考察した。つまり、近代以降、沖縄の八景文化は沖縄の人々の景観鑑賞方式や環境の美意識等に対して一定の影響力を発揮していたことを確認した。また、本研究の第3章で「筍崖夕照」の波之上及び「龍洞松濤」の奥武山を例としての考察を経て、歴史的景観の変遷から見る地域アイデンティティの形成の関係性の一端を示している。沖縄の地域アイデンティティの形成の視点に見る、八景を含む沖縄の歴史的景観から今日の都市公園・緑地に至る実証的歴史研究、公園・緑地空間にある地域アイデンティティ関連要素の測定等のデータ駆動による研究は、今後の課題である。

## 補注

- [1] 中山八景の4箇所、首里八景の6箇所の景勝地は今の那覇都市計画公園として持続している。
- [2] 戦前の首里市は1954年に那覇市と合併した。
- [3] 潘らの研究（参考文献3）は、八景の景勝地の地域範囲に応じて区域八景、都市八景、郷村八景、園林八景という4つのレベルに分けられる。本論文は沖縄の八景の類型を考察するため、この分類方法を参照した。
- [4] 原文は「支那」であるが、1946年内閣外乙第二五号「支那の呼称を避けることに関する件」に従う、「中国」の呼称を使用。
- [5] 戦前折々「瀟湘」は「淵湘」に誤って綴られることがある。

## 参考文献

- 1) 沈悦：兵庫の八景，国立環境研究所研究報告，Vol. 197，pp. 63-67，2007.
- 2) 田中 誠雄，金 東必，青木 陽二：日本における八景の分布について，ランドスケープ研究，Vol. 63，No. 3，pp. 246-248，2000.
- 3) 潘瑩紫，余思奇，萬敏：泛東亞地區八景文化研究進展．中國園林，Vol. 38，No. 5，pp. 121-126，2022.
- 4) 平良妙子：琉球中山八景「長虹秋霽」考：冊封使の中の「仙境」イメージ，琉球アジア文化論集，No. 6，pp. 81-96，2020.
- 5) 高橋 康夫：琉球の八景について，建築史学，Vol. 42，pp. 2-39，2004.
- 6) 前掲5)，pp. 29
- 7) 沖縄県：首里杜地区整備基本計画，沖縄県，第2章 pp. 9-11，2022.
- 8) 宋揚樂，池田孝之：多元文化による地域の形成とその

- 影響に関する研究—那覇市久米地区を事例として—, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 72, No. 621, pp. 61-68, 2007.
- 9) 高橋康夫: 海の「京都」日本琉球都市史研究, 京都大学学術出版会, 2015.
- 10) 前掲 5) pp. 2-39
- 11) 上間清, 青木陽二: 沖縄における「八景」の状況—文献およびアンケート調査成果に基づく考察—, 国立環境研究所研究報告, Vol. 197, pp. 72-76, 2007.
- 12) 岸秋正: 北斎の琉球八景について, 浮世絵芸術, Vol. 13, pp. 29, 1966.
- 13) 溝口康磨: 琉球八景, 浮世絵芸術, Vol. 29, pp. 29, 1971.
- 14) 童宏民: 冊封副使徐葆光の眼光: 『奉使琉球詩』の分析を中心に, 琉球大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻博士論文, 2014.
- 15) 冉毅: 清朝冊封使臣琉球八景詩之取境淵源与文化意義, 湖南師範大学社会科学学報 2017, No. 1, pp. 128-133. 2017.
- 16) 平良妙子: 琉球中山八景「長虹秋霽」考: 冊封使の中の「仙境」イメージ, 琉球アジア文化論集, No. 6, pp. 81-96, 2020.
- 17) 伊從勉: 「風景の多次元 流通する風景と流通以前の風景」, 古川彰, 大西行雄: 環境イメージ論, 弘文堂, 1992.
- 18) 高橋誠一: 琉球唐栄久米村の景観とその構造, 関西大学東西学術研究所紀要, Vol. 35, pp. 1-37, 2002.
- 19) 親泊仲真: 首里・久米の景観, 沖縄県立博物館・美術館: 沖縄文化の軌跡: 1872-2007, 沖縄県立現代美術館支援会 pp. 62-65, 2007.
- 20) 那覇市企画部市史編集室: 那覇市史 通史篇 第二卷(近代史), 那覇市役所, pp. 107, 1974.
- 21) 知念良之, 芝正己: 沖縄における住宅構造材の歴史的変遷に関する一考察, 日本森林学会誌, Vol. 97, No. 3, pp. 144, 2015.
- 22) 伊從勉: 市村合併という〈都市計画〉～首里・那覇の近代自治と官製都市計画の遅延, 人文学報 Vol. 104, pp. 40, 2013.
- 23) 沖縄文教出版編集部: 那覇今昔の焦点: 特別収録 写真にみる那覇の面影, 沖縄文教出版株式会社, pp. 83, 1971.
- 24) 東恩納寛惇: 南島風土記: 沖縄・奄美大島地名辞典, 沖縄文化協会, pp. 239, 1950.
- 25) 前掲 24) , pp. 29
- 26) 琉球新報社: むかし沖縄: 写真集, 琉球新報社, pp. 80, 1978.
- 27) 又吉真三: 琉球歴史・文化史総合年表, 琉球文化社, pp. 144-145, 1973.
- 28) 那覇市歴史博物館デジタルミュージアム, <https://www.rekishu-archiv.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/31058>, (参照 2024-08-30) .
- 29) 上地一郎: 旧慣諸制度の解体と日本への制度的統合—明治 32 年沖縄県土地整理事業の再定位—, 高岡法学, No. 31, 2013.
- 30) 仲間勇栄: 沖縄の杣山制度・利用に関する史的研究, 琉球大学農学部学術報告, No. 31, pp. 135.
- 31) 琉球新報社: 新琉球史—近代・現代編—, 琉球新報社 pp. 264, 1992.
- 32) 琉球政府: 沖縄県史 第 9 卷 (各論編 8 沖縄戦記録 1), 琉球政府, pp. 178, 1971.
- 33) 沖縄県立埋蔵文化財センター: 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査 (IV) —本島周辺離島及び那覇市編—, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 (25), 別紙⑩「那覇市戦争遺跡分布図」, 2004.
- 34) 加治順人: 沖縄の神社, その歴史と独自性, 非文字資料研究, No. 16, pp. 46. 2018.
- 35) 前掲 34) , pp. 47
- 36) 前田孝和: 近代沖縄神社神道史における御嶽・拝所の神社化の背景, 非文字資料研究, No. 24, pp. 38, 2022.
- 37) 日本風景協会編『風景』, 日本風景協会, Vol. 10, No. 11, pp. 2-4, 1943.
- 38) 渡辺重綱: 琉球漫録, 弘令社, pp. 34, 1879.
- 39) 東恩納寛惇: 南島風土記: 沖縄・奄美大島地名辞典, 沖縄文化協会, pp. 231, 1950.
- 40) 沖縄文教出版編集部: 那覇今昔の焦点: 特別収録 写真にみる那覇の面影, 沖縄文教出版株式会社, pp. 94-95, 1971.
- 41) 伊東忠太建築文献編纂会: 伊東忠太建築文献 第 5 巻, 竜吟社 pp. 3, 1936.
- 42) 伊東忠太: 琉球: 建築文化, 東峰書房, pp. 55, 1942.
- 43) 沖縄文教出版編集部: 那覇今昔の焦点: 特別収録 写真にみる那覇の面影, 沖縄文教出版株式会社 pp. 97, 1971.
- 44) 前掲 31) , pp. 262
- 45) 沖縄県公文書館所蔵資料琉球列島空中写真: 1945 年 12 月 10 日 沖縄本島中南部及び周辺離島, <https://www3.archives.pref.okinawa.jp/RDA/SKY/A/P451210A0/index.html?title=琉球列島空中写真%201945年12月10日>, (参照 2024-08-30) .
- 46) 沖縄県公文書館所蔵, 米海兵隊写真資料 04, [https://www2.archives.pref.okinawa.jp/opa/SearchPicsDetail2.aspx?pid=58172&cont\\_cd=0000013137](https://www2.archives.pref.okinawa.jp/opa/SearchPicsDetail2.aspx?pid=58172&cont_cd=0000013137), (参照 2024-08-30) .
- 47) 前掲 34) , pp. 57
- 48) 那覇市企画部市史編集室: 那覇百年のあゆみ: 激動の記録・琉球処分から交通方法変更まで, 那覇市企画部市史編集室, pp. 202, 1980.
- 49) 前掲 45)
- 50) 森槐南: 槐南集巻九, 森健郎発行, 1912.
- 51) 岡田泰祥: 絵筆を載せて, 内外出版株式会社発行, pp. 216, 1925.
- 52) 鈴木治雄: 望郷沖縄: 写真集 第 5 巻(沖縄県人物風景写真集) (宝玲叢刊), 本邦書籍 pp. 13, 1981. 注: この写真集はハワイ大学のハミルトン図書館に所蔵されている仲宗根源和編集, 沖縄県人物風景写真帖刊行会昭和八年に出版の『沖縄県人物風景写真帖』の再発行である.
- 53) 島袋源一郎: 沖縄案内 新版, 沖縄図書, 1937.
- 54) 仲吉朝睦: 観光沖縄案内, 向春商会印刷部, 1937.
- 55) 宮城龜: 沖縄教育, 沖縄教育会, No. 31, pp. 22, 1908.
- 56) 宮城仁之助: 龍潭同窓会々報第 1 号, 龍潭同窓会, pp. 37, 1908.
- 57) 宮城仁之助: 龍潭第一号, 沖縄師範学校校友会 pp. 49, 1902.